

---

Re.IS～For the love & peace～  
かりーぱん

---

暁～小説投稿サイト～ By 肥前のポチ

<http://www.akatsuki-novels.com/>

## 注意事項

このPDFファイルは「暁々小説投稿サイト」で掲載中の小説を「暁々小説投稿サイト」のシステムが自動的にPDF化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「暁々小説投稿サイト」を運営する肥前のポチに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

R e · I S ~ F o r   t h e   l o v e   &   p e a c e ~

### 【作者名】

かりーぱん

### 【あらすじ】

またまたまた、完全趣味小説ですはい。

何かねほんわかぱっぱっって思いついちゃうのよ。

てなわけで書きました。不定期更新間違いなしです。

え？似たような小説をみたことがある？いやですね、ビルドも終わってみんな記憶飛んじゃうしVシネもあるわけで結構予想外な方向に話が飛んでいったっちゃったんでもと方だともう收拾がつかなくなっちゃいそうだったんで新しくリメイクすることにしちゃいましたw  
改めてよろしく願いします。

※不快に思った方はブラウザバックを推奨します。

## 1. Bの災難／新たな天才

これは日本を襲った二つ目の危機。スカイウォールの惨劇から十数年。世界にISの存在を叩きつけた白騎士事件から数年後、この物語はここから始まった。

某国の路地裏。

『まさか俺が離れている間にこんなことになっているとわなあ。やっぱり歴史は繰り返すってことなのかね?』

白濁色の蛇が皮肉のように嘆く。すると、

「へびのおじさん」

蛇が振り替えるとそこには小さな男の子が一人立っていた。

『……どうしたんだ坊主?』

「いっしょにあそぼ?」

「……モンドさん、レイモンドさん!」

耳元で叫ばれていたのとおりあえずは起きた。どうやら机に突っ伏してねてしまったらしい。

にしても、懐かしい夢を見たもので。

「さとり、耳元で大声を出しちゃダメだって習ったでしょ?」

「あ、ごめんなさ、って貴方が起きないからでしょ!」

彼女は古明地さとり。俺が世話になってるところの家主だ。両親が他界し15歳ながら古明地家を支えている立派な少女だ。ISの日本代表候補にも選ばれるほどの実力者でもある。え? IS? それ

は後に説明しようか。

「もう、もう朝食はできてますから早く食べちゃってください。こいしももう食べてますから」

「ほいほーい」

適当に返事しつつリビングへ向かう。

「おはよー！お兄ちゃん！」

「おはよう。こいし」

この子はこいし。さとの妹だ。確か、えっと、いくつ差だったかな。歳。まあいいや。

「いったい誰に説明してるのですか」

「それは言いつこなしてもんでしょ」

え？まずツッコむところが違うって？

ではまず後回しにしてきたISの説明から始めようか。『無限の成層圏』。通称IS。どこぞの天災兎が作り上げた宇宙での活動を考えたパワードスーツだ。しかし数年前の『白騎士事件』を皮切りに今までISを見向きもしなかった学会が宇宙開発ではなく兵器への運用に目を付けたのだ。

そんなISもただの兵器だけでなくエンターテインメント競技としても発展した。先ほど出た日本代表候補というのも読んで字のごとくといってもいい。代表候補までとなるとそいつ専用のIS、所謂専用機というものが手に入る。さとの専用機は『<sup>サイドファイ</sup>第三の目』。読心術を可能にしたものだ。

少し脱線したなそんな輝かしいISだが、一つだけ欠点があったのだ。実はこのIS女性しか起動できないのだ。

そのせいで女尊男卑の風潮が助長し、一種の社会問題となっている。

ISの説明はこんなもんだろう。

「お兄ちゃん、今日は三人で遊ぼうよ！」

「そんなこと言ってもさとりは受験シーズン真ただ中じゃないか？」

「私は推薦で早くに終わりましたから」

「そういやそうだった。流石は代表候補生殿だ。」

「そんな大層なものでもありませんよ。それよりもレイモンドさんこそ今日は『nascita』のシフトの日ですよ」

ん？…あ。そうだった。

「遅刻だなこりゃ」

「わかってるのならさっさと食べちゃってください！」

「あいよ。てことだからごめんなこいし」

「なら、お兄ちゃんと一緒に行く！」

「あ、それでいっか」

「だってあそこ客来ないし。まずいコーヒーの定評がついてしまっているだろう。」

「それじゃあみんな遊びに行こー！」

「おー」

「……あれ？私も行くの」

った。レストランカフェ『nascita』。マスターのコーヒーとたまに厨房に立つアルバイトの料理が評判な謂わば隠れ名店といわれるカフェである。

「こんちわー。惣一さん」

「おお！レイ！今日は遅刻しなかったんだな！」

「さとりにも口酸っぱく言われちゃって」

この人は石動惣一。この店のマスターだ。元は宇宙飛行士で、火星にも行ったのだとか。

「戦兎さん達は？」

ん、と後ろを指す。彼の言葉を理解し奥のトイレの扉を開けるとある倉庫へと飛んだ。そう、ここのトイレの扉は秘密があり条件満たす開け方をすると空間転移するのだ。仕組み？わかる分けねーじゃん。こんなトンデモ。

「あれ？紗羽さん。今日は休憩ですか？」

「レイ君。久しぶり！たまにはここで涼まないかね」

彼女は滝川紗羽。フリーのジャーナリストだ。政治家氷室玄德、通称玄さんと恋仲のお方だ。ここの常連である。

「お久しぶりです。紗羽さん」

「久しぶりー！」

「さとりちゃんにこいしちゃん。いらっしやい」

そんな他愛のない会話をしていると、ブーっ！と何かを噴く音が聞こえた。

「ちょっと、何やってんのよ万丈！」

と、怒鳴る紗羽さんが拭き取っている床には茶色い液体が。元凶である当の本人の手にはコーヒーカーップが握られていた。

「ゲホッゲホ！まっず！んだこのコーヒー！誰だ入れたの！」

「あんたでしょうが！」

「おう！俺か！」

「……万丈さん、あーた。いや、やばいツッコみたいことが多いすぎる。」

万丈龍我。通称『筋肉バカ』呼ばれてねえよ！！』。元格闘家だが東都先端物質研究所の研究員『葛城巧』の殺害疑惑という冤罪？をかけられ「なんで疑問形なんだよ！！」東都政府に追われる身となった。のは前世？の話。前世なんかを持ち出されると何言ってるんだこいつ？と言いたくなるかもしれない。俺だって思う。だが俺はそれが嘘じゃないことを知ってる。それは近々話すことになるだろう。

「で、バカ兎二人は何を？」

聞いた瞬間にだ。まるでタイミングをうかがっていたかのように奥の区画からBON！と白煙を上げていた。

「……あの通り」

なるほど。って、白煙すごっ！けむっ！その中心には二人の人物がいて、奥にもう一人いた。

「……最悪だ。また失敗か」

「ムムム。まさかこの束さんがまたまた失敗するだなんてなあにやっつてんだか。」

「ちょっとお、また失敗したのお？もう凍結したら？」

「いやだから燃えるんじゃないか」

「いやいや、できるわけないでしょ。あんなシステム」

天才バカ二人が暴走する前に俺がわって入った。

「あ、レイ君！」

天才ならぬ天災、篠ノ之束。エプロンドレスにうさ耳という奇怪な姿をしているが、ISの基本理論の考察から実証までほとんど一人で行った自他共に認める天才なのだがその実態はシスコンで研究

バカの残念な人だ。

「確かに設計図やデータは不足しているかもしれないが、そのウサギとこの天っ才物理学者桐生戦兎に作れないものはない」

で、このもう一人の自他共に認める天才が桐生戦兎。ライダーシステムを組み上げこの世界を作った張本人。世界を作った何て言う（ry）。

んで、奥の人が石動美空。このマスターの娘さんでこの地下室に引きこもっている所謂ヒッキーである。それと同時にネットアイドルみーたんというもう一つの顔を持っている。

「そもそも、お前がこの研究に加われば万事解決なんだよ」

「それで前無理でしたよね？」

「もう昔の束さんじゃないのだよ〜！」

「お兄ちゃんだってあの時悔しがって自分の部屋のホワイトボード版真っ黒になるまで色々書いてたよね〜」

「あの後はくそ眠かっ、ってこいしいつの間に!？」

やべえ、全然気づかなかった。

「最初からいたよ〜」

えへへ、と無邪気な笑顔を浮かべているがまさか全く気配をさとらせないとわ。こいし、恐ろしい子!

そう、俺の部屋の壁はすべてホワイトボードに変えられているのだ。あの時は普通に悔しかったから貫徹しちゃってさとりめっちゃ怒られた。

「ま、暇ですし。実験に付き合いますか。それに俺も完成させないと気が済みませんし」

「うわー、レイ君の本音だだ漏れだー」

「それじゃ、実験を始め、「みんなテレビ見て!？」」

戦兎さんの言葉を遮るように紗羽さんが勢いよく扉を開いた。

顔の形相からしてただ事ではなさそうだ。

「紗羽さん。もしかしてこれ？」

今まで沈黙を貫てきてた美空さんがスマホを紗羽さんに向けた。

「そう！これよこれ！」

俺ら三人は紗羽さんの後ろから画面をのぞき込んだ。ちなみにこいしは背伸びしてもジャンプしても届かないため俺によじ登り肩車の体制になった。

写していた画面はYahoo newsみたいだ。その記事の見出しを見て驚愕を隠せなかった。

そこには、

『世界初のIS男性操縦者現る』と書かれていた。

「は？」

さすがの天才二人も間抜けた顔をしていた。そして俺は、

「……最悪だ」

恩師の口癖が思わず出てしまった。

## 2. Bの災難／現実是非常なり

例のニュースが世界に流れてから政府、いや世界全体の対応は早かった。

もしかしたらほかにも動かせる存在がいるかもしれないという希望を持ちながら、全世界の男性の適性検査を決定した。

だが、俺たち『nascita』の男たちはそうもいかない。

戦兔さんは言わずとも知れた仮面ライダーだし、てかこの人ら戸籍とか大丈夫なのか？元々この世界に存在しないんだろ？戦兔さんと万丈さんって。

というわけなので、

「ゲンさんに呼ばれたわけだけだよ。こんなめんどくせーことやる意味あんのかよ」

「まあ、バカのお前にはわからないだろうが」「できねえわけがあるんだよ」

首相官邸の前でだべっていると戦兔さんの台詞にかぶせて万丈さんを弄る人影が一つあった。

「あ、かずみんさん」

「よお。久しぶりじゃねえか」

猿渡一海。かつて戦兔さんや万丈さんたちの前に立ちふさがった仮面ライダーグリスだ。だが、後に新たな敵が牙を向けた際には一緒に戦ったという。この日本に移り住んでから俺を鍛えてくれた人でもある。

「お前も呼ばれたのかよ」

万丈さんが考えてその言葉を言ったのかはともかく、確かに俺もそれは思った。戦兔さん達は言わずもがなだし、俺も俺でこの

国の国籍とった訳じゃないし。え？ビザ？色々訳があるんだよ。まあ、とどのつまり俺も普通に検査を受けられるわけがない。その点かずみさんは両方クリアしてる。大地主だし。

「それにお前らについてけばみーたんに会えるしな！」

ちなみにこの人美空さんのもう一つの顔『みーたん』の熱狂的なファンであり会うたびにそれこそアイドルオタクのそのの反応をする。紗羽さんに五万ドルク請求される未来しか見えない。

重厚な扉を開けると数人の研究員と髭が似合うダンディーな男がいた。何時ものライダースーツではなく普通のスーツをバツ！とはだけさせTシャツを俺たちに見せつけた。

『よくぞ来た』オオラァ！

この髭こそ、この日本の首相の七光、ゲフンゲフン！息子、氷室幻徳だ。かずみさんと同じく元々は戦兎さんたちの敵だったが仮面ライダーローグとして戦い、贖罪を果たし、首相補佐をやってる。「今日、お前たちを呼んだのはほかでもない。わかっていると思うが、I Sの適性検査だ。じゅんにまずは」

「俺からやりますよ」

というより。

「ほかの皆さんを呼んだのは建前で用があったのは俺だけでしょ？」

「……わかった」

「……レイモンド」

戦兎さんは眩きながら哀愁漂う視線を送り、猿渡さんはただ無言を貫いていた。おそらく万丈さんはわかってはいないだろうが。

俺は構わず検査用のI-Sに触れると案の定I-Sは起動した。

「は、反応ありですっ！」

「適合率100%、二人目の適合者です」

「……………」

「マジかよ」

「…………最悪だ。まさか予想が当たるなんてな」

はあ、これからがめんどくさいことに。

### 3. Bの災難／動き出すFate

首相室で検査結果が出てしまいもう二十歳になるにもかかわらず高校一年生をもう一度やることが確定してしまった今日この頃。あの日から数日が経ち何か変わったことがあったかというところばっかは何もない。あるとしたら今まで並行作業でよかったものがあるものを優先的に進めていかなければならなくなってしまったくらいのものだ。だが、それですべての開発が間に合うかって？間に合うんだなあ、これが。

「フムフム、『仮面ライダー　〇〇〇オーズ』、『プトティラコンボ』に専用武器の『メダガブリュウ』か。ラビラビタンタンのフルボトルバスターと似た機構の武器か、実に面白い」

戦兎さん、もとい葛城巧が集めたあらゆる仮面ライダーに関する資料を読み漁り新たな発明を進めていく。この資料がある限り俺の発想は無敵大だ！え？パクリ？リスペクトと呼びたまえ。さあ、どんどん行こうか！フーツ！夜は焼き肉っしょー！さらにインスピレーションを刺激され作業を加速しようとしたその時に機械音と何故かいるこいしの寝息――良く寝られるな――以外のデバイス音が室内に鳴り響いた。

『ギャーオ、ギャーオ』

「ん？どうした、ファング？」

こいつは恐竜型自立行動防衛メカ『ファングダイナソー』。戦兎さんが開発したドラゴン型自立行動メカ『クローズドラゴン』と同規格で俺が組み上げたメカだ。元ネタというか引用元は風都という街で活動している仮面ライダーWの自立行動デバイスだ。名前もそのまんま引用した。

ファングは身構えているように見えた。ということは、だ。

「誰かがいる、ってことだ」

基本ファングは戦兎さんたちや古明地家の人たちには戦闘態勢を取らない。そう設定しているのだ。なぜか万丈さんは例外なのだが、だからファングが身構えたということは逆説的に俺が知らない人間がここにきているということだ。

俺が立つとファングは俺の右肩に乗ってきた。扉を開けてさとりのもとへ行こうとしたらドアノブに手をかける前に自然に扉が開いた。

開いた扉の前にはさとりとあともう二人、童顔の人とどっかで見ただことがあるような人がいた。でも思い出せないから別段大したことではないんだろう。

「お、さとりちょうどよかった。で、そちらのお姉さん方はどちら様で？」

さとりはこめかみを抑えお姉さんの方は目を見開かせ驚いていた。あれ、何かまずいこと言った？俺。

「まったく。……昨日言ったじゃないですか！」

スーパー回想タイム！スタート！

『レイさん。明日なんですけど』

『ん？どしたの？』

『明日の午後一時にI S学園の織斑先生が会いに来るそうなのでそ

のつもりでいてください』

『んー。りょーかい』

『ちゃんと聞いてるんですか？』

『ん、大丈夫大丈夫』

「ああ、そんなことも（ry「想起『テリブルスーヴニル』！！」  
さとりは瞬時にISを起動。弾幕を発射する。って容赦なすぎで  
しょ？童顔の人がめっちゃ驚いちゃってるし。喰らったら、まあい  
ろいろ生命的にやばいけど、まあ、大丈夫。」

「ファング」

俺の呼びかけにファングが応じ、弾幕を弾く。しかし、数発弾い  
たところでファングは吹き飛ばされてしまう。まあ、さとりが数発  
で済ませてくれたためありがたいが。この弾幕はただの銃弾による  
弾幕ではない。『エネルギー粒子弾幕システム』。ISの試合はそ  
の使用上、SEがエンプティになったら敗北である。極論を言えば  
相手を攻撃しなくともSEを空にすれば勝てるのだ。そしてこのシ  
ステムはISにシールドエネルギーとは小分けしたエネルギータン  
クを搭載しそこから操縦者を傷つけずにSEを削る、という設計の  
はずだった。しかし、現在の世界のIS技術では『ノックバックを  
殺しきれなかった』のだ。つまり、開発は不可能だった。あの天災

兎でさえ「今は無理、それよりも今はタキオン粒子が先決だよ！」と匙を投げた？のだ。多分飽きたな。それがゆえに中途半端の宙ぶらりんな状態になっているのだ。

「古明地。やりすぎだ。山田先生も戸惑っているだろう」

「これくらいしないと意味がありませんから」

痛い目を合わないとわからない子みたいに言わないでもらいたいなあ。

いったん床に錯乱してた設計図やら工具やらを部屋の隅に追いやり、座布団とちゃぶ台を持ってきた。もともとこの部屋は戦兎さんの部屋を丸々そのまんまパクってレイアウトしたから話し合いができそうな机椅子は一切ない。ちなみに、さとりが弾幕放ったのにこいしはベッドの上を陣取ったまんまだ。

「改めて、私は織斑千冬だ。I S 学園で教師をやっている。そしてこの方は私の学級で副担任をしている山田真耶だ」

「山田真耶です。よろしくね？えーと」

織斑千冬？ああ、ブリュンヒルデか。この人が世界最強と名高い女性か。確かに強いな。少なくとも俺の知る中で五指に入る。俺でも素じゃ勝てそうにない。

「レイモンドです。下の名は名乗る気はありません」

「ん？どういうことだ」

「『現実には小説より奇なり』。まあいろいろあるんですよ」

そのあとに手をひらひらさせながら「あ、在日期間は長いんで言語は気にしないでもらっても結構です」と付け加える。

「……まあいい。それでIS委員会は男性操縦者二人を保護する方針で「保護ではなく、監視。と言えましょう？」……どうしてそう思う」

「どんなに繕ってもISは今や兵器と化してしまっている。何ならISは現代社会システムの根幹だ。そんな中の現れた男性操縦者と言うイレギュラー、世界にとってはモルモットだろうし、女権団にとっては女尊男卑を脅かす目の上のたんこぶだ。なら、手の届くところに置いておきたい。これが俺の解答だ」

「……入学、してもらえないか？」

「……」沈黙は肯定と受け取って構わない。目の前の人の目が言っていた。すげえ、眼力で意思疎通可能にしちゃったよこの人。

「二つ質問しても？」

「なんだ？」

「一つ目。俺、これでも今年で二十歳になるんですけども」

「いいの？それ。」

「問題ない。高校は義務教育ではないからな。世の中には留年という言葉もある」

おい。最悪じゃないかそれは。俺が留年なんて天地がひっくり返って超新星爆発してもあり得ないぞ。何てったって天っ才と天災の教え子ですから自分。

「じゃ二つ目。こいつ、こいしはどうするんです？あづけられる身寄りもないですよ？よって、俺は入学できません。こいつの世話が

あるんで」

この言葉を飛ばした瞬間、さとりは再びこめかみを抑えた。なぜだ。織斑さんは啞然とし、山田さんは「妹さん思いなんですねぇ」とほんわかとした雰囲気を出していた。

そもそも。さとりがいない間は俺がこいしの世話をすることになっていたのだ。これが逆ならば問題ないのだ。さとりはしっかりしてるしな。でもこいしじゃなあ。家事出来ないし。心配だ。

「……自分の身の心配の前に妹の心配か？」

「当たり前じゃないですか」

「即答しないでください！」

何を言ってるんだ。お前だって送り出したくないんだぞ。

「えっ？」

女子高だぞ？女の怖さは尋常じゃない。特に嫉妬は言葉にするのも憚れるほどの陰湿さと恐怖を秘めている。さらにそこに男一人を放り込むわけだろ？うん昼ドラや韓流ドラマのドロドロでギスギスした修羅場になるのは必定。そうなれば、義兄として男性操縦者<sup>ムシ</sup>を抹殺しなければならぬ」

「レイモンド。お前は声が漏れているぞ。偏見を持ちすぎだ。それと古明地の専用機的能力を忘れてやるな」

あ。やっちゃったZE☆シ

「まったく。………ハア。ならお前が責任もって面倒見る。それなら学生寮に住むことを許可してやる」

「わかりました。ではお言葉に甘えさせていただきます」

「妹をそんな拾ってきた犬みたいに言わないでください」

さとりが羞恥から帰ってきたらしい。まだ顔真っ赤かなまんまだけど。こいしはまだ寝てる。

「では今後のことを軽く説明する。あとで資料を渡すがそこには無

駄なことも書いてある。だから今頭に叩き込め」

教師説明中。

「……………というこだ。わかったな」

「つまり、クラスは織斑先生のクラスで、形式的な入学試験を受ける。ということでもいいんですね？」

「うむ。まさに話を聞けなかったやつでも一瞬でわかる解説だったな」

うん。だろうな。

「では試験は来週。入学式はその翌週だ。では邪魔したな古明地」

「じゃあ来週きてくださいね」

「はい。ろくにお構いできなくてすいません」

「そういえば最後にもう一つだけ質問いいですか？」

「答えられる範囲でなら答えよう」

「そうですかなら、



#### 4・Bの災難／二人目

俺はとある駅のロータリにて参考書を読んで人を待っていた。ちなみに参考書の中身はI S学園の授業に使うものだ。千冬さんに読んどけって言われたのだ。てか待ってるのもあの人だ。そう、とうとう試験の日がやってきたのだ。この日のためにずっと温めてきた発明品を披露する日がやってきた。他の先輩ライダーのパクリ開発品が多いが、この技術だけは俺のものだ。これは戦兎さんや束さんすらもこの技術を発見できなかった。まあ、法則がわかる今ならば簡単にやってのけられるのだが、やってはいない。あまりにも危険だからだ。

「うむ。集合時間前にきているとは感心だな」  
顔を上げると千冬さんがみおろしていた。あ、もう集合時間だったのか。

「どうもです。今日はよろしく願います」  
「しかもすでに予習してるときだ。生徒の鏡だな」  
ぶっちゃけ復習なんですけどね。束さんがうちにいるの知ってる人なんて俺らぐらいだからなあ。ここは無難に流すか。

「何て言っても俺もまた天っ才ってやつなんで」  
「……………なるほど。では行くぞ」  
なんか顔がそうかそうか君はそういうやつなのか、という顔をしている。そんなにキャラが濃い人がいるのか。学園には。大変そうだな。

「おお。結構広いですね」

「世界から資金援助を受けているからな。これくらいの設備は整えないといけないのだよ」

今は学園内を歩いている。それは当たり前なのだが、もう広いのなんの。ホームページをざっと見たが数字を見ると実際に歩くのでは違うということ話実感する。

「ついでぞ。ここが第三アリーナだ」

「今更ですけど、まさか千冬さんと戦うんじゃないですよね？」

「ほう。自信がないか？」

「いえ、試したいものも試す余裕がなくなるんで」

この人が相手なんて勝ち目あるのか？いやでも現役を退いてそこまでたっていないな。勝ち目極薄だよ。

「安心しろ。私ではない。ピットまで案内するからついてこい」

「ここがピットだ。アリーナを使用する場合必ずここを使うだろうから覚えときたまえ」

ほほう。なかなか人数が入りそうだな。専用機持ちの人たちが試合をするときに関係者が入れるようにとったところだろう。モニターもあるしわざわざ観戦席に行かなくともいいというわけだ。「本当は私がお前の実力を見たかったのだが、ここでお前を見ていう上からの指示がからな。さて、お前には専用機がないからこちらから訓練機を貸すことになって」「それについては心配無用です」？どういうことだ？」

俺は懐から二つの穴とハンドルのついた赤と黒の機械を取り出す。「専用機ならばここにあるので」

「なに!？」

「それじゃ、行ってきますんで千冬さんはゆったりとみててください」

そう言ってアリーナへ出ると、そこには見知ったというか知っている顔がいた。

「久しぶりね。レイモンド君」

「あなたは確か……更識楯無」

日本における暗部『更識』のトップにしてロシア代表。なぜ俺がこの人を知っているかというところとゲンさん会いに行ったときに知り合った。それぐらいの関係だ。

「なるほど。ロシア代表か。千冬さんよりかはマシかな」

「それよりも。ISも纏わずにここに来るとはね。私もなめられたものね」

「おっと、そいつは失礼した。それじゃ」

懐から再び例の機械を出し腰に当てる。すると自動で黄色いベルトが巻き付いた。

それに併せてさらに右手に青の左手に赤のボトルを振る。

「それは、ビルドドライバー!?」

戦兎さんにも束さんにもできてない俺だけの技術、それが『フルボトルの複製』だ。火星で発見された特殊な成分を複製することは可能なかって?フッフ、可能なのだよ。この天才物理学者と天災の弟子、レイモンドにかかれね!ちなみにこのビルドドライバーも俺が複製した。

「さあ、実験を始めようか」シャカシャカシャカ!ジャキン!

『R a b b i t ! T a n k !』

ハンドルを回す。回す回す回す回す回す。これ以上はやめとこう。ゲシュタルト崩壊しそうだ。ちなみに俺のビルドドライバーにはベストマッチ判別機能は付いていない。もうあらかたのベストマッチは見つかってるからいらなかなーって。

『A r e Y o u R e a d y ?』

「変身!」

自分の前後に展開していた左右半身のパイプが合体した。

『鋼のムーンサルト!ラビットタンク!Y e a h !』

「会長さん?呆然としてるところ悪いけど、行くよ!」

「っ!(まずい!)」

ラビットの脚力で完全に不意をついたつもりだったがかわされた。

「今のをかわすあたりさすが更識ですね。一筋縄じゃいかなそうだ」  
「生徒会長たるものこの学園の生徒の頂点に立っていなければなら  
ないもの。そう易々と勝てるなんて思わないことね」

「じゃあ、胸を借りるつもりで行かなくちゃあな！」

このフォームじゃまず近づかなくちゃ始まらない。そう思い近  
づくも、まだこのときの俺は更識という家を理解し切れてはいな  
かった。

(ラビットタンクフォームにはこれね！)

会長は蒼流旋の武装の一つ『ガトリング砲』で扇状に放つ。

「っ！はあ！」

ラビットフルボットの兎の『跳躍力』を生かしガトリング砲をか  
わし上から攻めようとするも、読まれていたのか主武装の槍の鋭い  
一突きが飛んできた。

「ぐあ！ちっ！読まれてた、いや誘導か！」

ガトリング砲を扇状に放てば横に逃げ道はなくなる。跳躍力を生  
かして上に逃げ反撃の一手にする事を読み切ったの一突きだったの  
だろう。

「なるほど、戦兔さんのビルドの戦闘データからある程度の対抗策  
は練れてるってことか」

「フフ、正解。我が国の中でも限られた人間にし知られていない防  
衛手段とは言えども戦力は戦力。万が一の時のための対抗策がこん  
な所で役に立つなんてね」

本当にその通りだ。まさかこうまでも対抗策が練られてるなんて  
誰が予想するだろうか。

でも、

「それよりも、急な爆発にご注意を」

もう一度配管工もびっくりなジャンプを繰り返す。そして先ほど

俺がいた範囲が爆発を起こした。

「うそ!? 『熱き情熱』クリア・パッションをかわされた!」

「生憎、情報を得られるのは更識だけの特権じゃない」

更識はなんととっても国の暗部だ。その情報網は侮れない。だがこっちには天災様や紗羽さんがいる。あの人たちがいれば知れない情報なんてないに等しい。紗羽さんどうやって情報仕入れてくるんだろう。

『熱き情熱』クリア・パッション。彼女の専用機『霧纏の淑女』ミステリアス・レディに搭載されている『

アクア・クリスタル』から構成されるナノマシンの水を霧状に散布し発熱、一瞬にして気化させることによって小規模な水蒸気爆発を起こさせる技だ。

「でも、追い詰めたのはこっちのようね。空中では身動きはできない!」

その通り。まだジャンプの運動エネルギーは真上へと向いているがそろそろ落下し始める。だけど、もちろんそれも折り込み済みだ。素早くドライバーに差してあるボトルを抜き、他のフルボトルを取り出す。

『TAKA! GATLING!』

そして回す。

『Are You Ready?』

「ビルドアップ!」

空中で新たなフォームへ変わる。

『天空の暴れん坊! ホークガトリング! Yeah!』

「姿が変わった! っていうか飛んでる!?!」

ホークガトリングフォーム。鷹の飛行能力と機関銃の連射能力をかけ備えた姿だ。背中の『ソレスタルウィング』による飛行能力に驚いているところを見るとどうやらビルドの全てを把握しているわ



「……負けたわ。やっぱりすごいよね。仮面ライダーって」  
「いやいや。会長が最初から本気を出してたら負けてたのは俺だったよ」

一度だけ会長の試合の映像を見たことがある。それは圧倒的という言葉は足りないほどだった。むしろ相手が惨めだった。戦兔さんが戦っているところを何回か見たくらいでの情報しかない俺では善戦に持ち込むのがやっとだったろう。

「そう、かしらね。ありがとう。なら、学園の先輩として一つアドバース。それはあくまでもI Sよ。それは頭に入れておくことね」といつてきた。やっぱりきずいちゃいます？

「どうも。ではまた。次は入学式にでも。C i a o♪」  
こうして、なんとか勝つには勝ち、試験を終えた。

I S 学園入学式当日。

1年1組の教室は、静寂に包まれていた。28名の女子生徒が集まれば姦しくお喋りが繰り出されると思われるはずが、そんな事は無かった。

女子生徒たちが静かにしている理由。それはこのクラスに編入されている二人の男子生徒。

一人は最前列の教壇前の席に座っており、女子の視線に気付いているからか身体がカチコチに固まっている。彼の後ろ側の席に座っている子たちは見えないだろうが、今の彼の顔色は病に当てられているかのように悪くなっている。こちらが一人目、<sup>The First</sup>織斑一夏だろう。そしてもう一人が。

(うーむ。研究に身が入らん)

そう。それがどこぞの天っ才の抑え役にして、天才と天災が生み出した天っ才物理学者であるこの俺だ。

いやね。別に緊張とかそういうのではないんだ。二十歳にもなっ  
て高校かよなんていう落胆も……少しはあるな。うん。

「皆さん、入学おめでとうございます。私は今日からこのクラスの副担任を勤めます、山田真耶です。これから一年間、宜しく願います」

ああ、最悪だ。うん？何がって？席だよ席。普通席は五十音順だ。この学園もその例はこぼれない。俺はレイモンドだから、窓際というベストポジションを獲得したのだが、問題はその後ろのやつがな

あ。

「織斑一夏です。……以上です！」

ああ！もう！せっかくの晴れ舞台？なんだから辛気くさいのはやめた！

「お前はまともに自己紹介もできんのか」

「げ！範馬勇次郎！」

「誰が地上最強の生物だ！」

ポジティブに考えればまた新たなことを学べるチャンスってことじゃないか！しかもほぼ奨学金で！学者としてこんなうれしいことはないだろう！そう考えると悪いことばかりでもない気がしてきたぞ。ここは、心火を燃やして俺のアイテムを、

バシィン！という音が教室に鳴り響いた。特に俺の頭の上で反響をしていた。

「（声にならない悲鳴）~~~~っ！まだ研究の途中でしょーが！」

バシィン！とさらにもう一発追加をお見舞いされた。

「自己紹介の途中だろうが。馬鹿者が」

あれ？あ。ほんとだ。

コラ。そこ。ハアってため息つかないの。後ろ向かなくても聞こえてるんだからな。

「まったく。お前の番だ」

「あ、はい。んじゃ改めて。俺はレイモンド。今はファーストネームだけで勘弁してくれ。歳は二十歳だがーSに乗れるってことでこの学園に入ることになった。趣味は機械とかの物イジリ。嫌いな物は鮎と女尊男卑。以後、お見知り置きを」

フッ。どうよ。この無難な自己紹介。地味に聞こえてきた織斑弟

の二の舞になりたくないからな。あ、でも出席簿ですでに叩かれてるわ。

教室に沈黙が、続く。でも嫌な予感が加速的にやってくる。そしてそれが最高潮になった時にそれはやってきた。あ、やべ。

「「「「「きゃあああああ!!!」」」」」

うお!? な、なんだ!? 女子の歓声が衝撃波となって、主に鼓膜を叩いてくる。もはや物理法則を超えててヤベーイ。

「イケメン! このクラスに二人ものイケメンが!」

「しかも、織斑君と対照的でインテリ系男子、嫌いじゃないわ!」

「この後寮で朝まで語り明かしましょうか」

「お母さん! 私を生んでくれてありがとう!」

「ウェー—————(owo)—————イ」

……………なんじゃこりゃ。阿鼻だな。

「やかましい! 静かにせんか!」

……………長くなりそうなんでキリのいいところまでまで。

キングクリムゾン!

数時間後。

授業が終わり学生の大好きな休み時間へと入った。この学園は入學式が終わったその日に授業が始まるらしい。中々の鬼畜なタイム

スケジュールで心がピョンピョンピョン、ラビット！すっぞ！  
うん。もう何がなんだかわかんねーな。

「なあ、ちょっといいか？」

「ん？どうかした？」

「いや、俺ら数少ない男性操縦者だろ？今後も何かと一緒にの機会が増えるだろうし。仲良くしときたいなあって」

「それはいいけど、年上にタメ口なのは頂けないなあ」

「ま、マジか。す、すみません。出席簿で叩かれて悶絶してたもんで」

ああ、あれを食らった先駆者がいたのか。てかあの人弟にも容赦ねーな。まあ、教師だから仕方ないのか。

「まあ、あれを食らった後ならしょうがない。それに別にいいよ。タメ口で。ちょっとからかったただけだから。改めて、レイモンドだ。

今はファーストネームだけで勘弁してくれ。二十歳だ」

「おう、宜しく。俺は織斑一夏だ。一夏でいいぜ」

お互いに親睦の証に握手をしてみると、一人の女子がやってきた。

後相変わらず後ろから視線。

「一夏。ちょっといいか？」

「おお！箒！久しぶりだな！」

箒？ああ、束さんの妹さんか。シスコンだからな。あの兎は。よく話を聞いていた。そして、その胸中に秘めている思いも。

「一夏。行ってきなよ。どうやら感動の再会みたいじゃないか」

「感動って、まあ、そうだな。すまない。また後で！」

そう言って俺の席を去っていった。元気だねえ。最近の若者は。

さて、と。

「こっちも感動の再会、か？」

俺は自分の後ろの席のやつに話しかけた。

「確かに。感動的だ。だが無意味だ」

「ひどい言い草だな」

まるで心外だと言うかのように大きく肩を竦める。だが、そういうられるのも自分の責任だ。

「兄弟の感動の再会だぞ？」

その言葉とともに俺は今日初めて自分の後ろの席を見た。

そこにはとても高校一年生には見られないであろうほどの身長の子がいた。

「五年ぶりだなレミリア。背が伸びたか？」

彼女はレミリア・スカーレット。俺の妹だ。

背伸びたか？レミリア」

「家を捨てた男が今更何を言うかと思えば。よくもぬけぬけと！」  
そう言うレミリアの目には敵意が混じっていた空間がゆがんで見えるほどには凄みが増していた。

「……何も連絡を入れなかったのは悪かったと思っている。恨まれても仕方ないことだ」

「っ！……まあ、いいわ。いずれ、いや近いうちに家を捨てたことを後悔させてあげるわ。そういう運命なのだから」

そう吐き捨てると、教室を出ていった。

心が痛むな。まさか、ここまで恨まれてるとは。いや、わかっていたことだ。後悔はない。覚悟が揺らいじまう。

俺にはやらなければならぬ使命がある。

ちなみにチャイムギリギリに戻ってきたレミリアはセーフだったが、遅れて戻ってきた織斑と束さんの妹——箒だっけ？——は千冬さんの出席簿が脳天に刺さることになった。

それは、二限目を始める前の織斑先生のある一言によって始まった。

「そういえば、クラス代表をまだ決めていなかったな」

クラス代表。織斑先生曰く、委員長みたいなもんらしい。近いうちにあるクラス代表戦など何かとクラス代表として試合に駆り出されたりするだろうし会議などにも出される。絶対めんどくさいやつやん。何が何でもやってたまるか、と決意もむなしく、

「はい！織斑君を推薦しまーす」

「なら私はレイモンド君がいいと思います！」

などなどの他推が続出した。もちろん俺も一夏も「はい。いいですよー」といえるほどお人よしでもない。蹴りたいのはやまやまだが織斑先生がそれを却下。なんでも、

「それだけお前らに期待しているということだ。諦めて受け入れる」  
とのこと。どうしようかな。何としてもこれを蹴って研究やその他もろもろの時間を確保しなければ。いろいろ考えていると、

「納得がいきませんわ！」

と金髪縦ロールちゃん。誰だあれ？お国自慢と日本への侮辱といいたい放題だった。大丈夫かなあ。話を聞く限りクラス代表候補生らしい。国際問題待ったなしだな。レミリアなんかフツと嘲笑を浮かべているし。日本の侮辱のこともあり一夏が喰ってかかった。

「なんだあ？てめえ！イギリスだって対して自慢できるところなんかねーだろうが！飯の激マズ選手権何連覇だと思ってるんだよ！」  
イチカ！キレタ！

あゝあ。まるで子供の喧嘩だよ。そんな舌戦というのもおこがましいキャットファイトが続いてると思いきや、

「決闘ですわ！」

「いいぜ！一番手取り早え！」

……………なんでえ。しかも、負けたら俺たちは奴隷にされるらしいし、ってなんで俺まで巻き込まれてんの！？

「それで？俺たちはどれだけハンデをつければいい？」

「はぁ？ 早速お願いかしら？」

「いや、俺たちがどれ位ハンデをつけたらいいかって聞いているんだよ」

一夏の言葉に俺と後ろのレミリア以外が笑っていた。いや、嗤っていた。

「織斑君、それほんとに言ってるの？」

「男が女より強かったのって、ISが出来る前の話だよ…」

「もし、世界が男と女で戦争したら、男は三日も保たないらしいよ」

「今からでも遅くないよ二人とも！ 謝ってハンデつけてもらえば？」

「断る！！！」

と、彼は勢いよくそう言ったが俺の場合はちょっと違う。

「いいんじゃないの？ハンデつけてもらっても」

飄々と言ったのけた俺に一夏も織斑先生も驚愕の顔を浮かべていた。

「はあ！？何言ってるんだよ！？お前あんなこと言われて悔しくねーのかよ！？」

「まあ、落ち着け一夏。考えても見ろ。彼女は代表候補生のなんだろう？」

俺のその言葉に金髪縦ロールちゃんは愉悦の笑みを浮かべる。そして他の女の子もウンウンとうなずいている。けど、たぶんみんなが考えていることと俺の考えていることは違うと思う。たぶんドン引かれる。だが私は黙らない。

「例えド素人に負けたとしても『ハンデがあったから負けました』の方が面子の保ちようがあるだろ？」

「「は？」」

クラス全員の声が重なった。そりゃそうだろう。何せド素人の俺が代表候補生に勝利宣言しているんだから。

「……日本の殿方はジョークセンスをお持ちみたいですね」

「ジョークじゃないさ。君は俺には勝てない。IS、それも第三世代何ていうボタンを一つ掛け違えた欠陥機を使っているようじゃを絶対にね」

「な！？」

金髪縦ロールちゃんは驚きの声をあげ、今回に限っては一夏やあの織斑先生も驚きのあまり絶句していた。当たり前だろうな。現在世界が躍起になって開発に着手している第三世代機。それを全面否定すると言うのは現在のISを否定すると言うのと同義だ。まあ、何かしら追求される前にこの話を終わらせちまおう。

「これは覆し用のない事実だ。俺の頭にはすでに君に勝つ方程式は完成している」

言うことをいいこれ以上はなにも言わんと主張するように腕を組む。格闘技で試合前にビッグマウスをやるあれだ。まあ、俺の場合のはかのヘビー級チャンプモハメド・アリのごとく有言実行しちゃう

うんだけどね。

そんな自画自賛していると後ろから椅子を引く音が。

「先生。私もその戦いに加わらせていただくわ」

「うむ。スカーレットも自推か。他にはいないな。ならば一週間後この四人で総当たり戦を行う！勝ったやつが好きに決める」

とんとん拍子に話が進んでしまったが。レミリアまで加わってくるとはな。多分俺に用があるんだろうけど。しかも、あいつルーマニアの国家代表なんだよな。

一夏と縦ロールちゃんだけならそこまで本気にならなくても大丈夫だと思ってたが。レミリア相手ならボトルの出し惜しみはしないほうがいいかな。

戦兔さん達に相談するか。

7. 日常のS／チャンスは準備された心に

「で？どうすんだよ？」

「どうするとは？」

「決まってるんだろ。代表決定戦のことだよ」

現在は昼休み。食堂にて一夏、篝ちゃんと昼飯を食べていた時の一幕だ。ていうか一夏。どうするって。

「やれることをやるしかないだろ。機体の準備したり。相手を研究したり」

「特訓はしねーのかよ？」

「え？世界三大珍味の？」

「それはトムヤムクン」

「いいか？この失敗から学べばいいんだ」

「それは教訓」

「我に従って<sup>俺</sup>いればよいのだ。雑種」

「それは暴君！お前ふざけてるだろ！」

こいつ中々ノリがいいな。こいつで遊、弄るのはともかく。

「ま、大丈夫大丈夫。それよか、お前はどんなだよ」

おそらく、いや確実にお前のベット最低値だぞ。いや、俺もわからないな。クラス内での印象的に。

「そうだぞ、一夏。勝算はあるのか？」

「うん。どうだろう」

「格闘技とかの経験はないのかよ？」

格闘技なんかの経験は意外と侮れなく実戦経験が乏しくてもちょっとした戦闘でそこからを發揮してくるのだ。身内だと万丈さんなんかがいい例で、ドラゴンフルボットの力も相まって凄まじい爆発

力がある。

「小学校の頃は剣道をやってたんだけど、中学でバイト始めるために止めちゃったんだよ。でも、中学時代のやつと喧嘩はやってたからちょっとは自信あるぜ」

「なっ！貴様！剣道をやめたとは何事だ！」

箒ちゃんがなんかげきおこスティックファイナリアリティポンプンマスタースパークなのはひとまず一夏に丸投げしておいて、ふむ。喧嘩系か。喧嘩系はやばい人はやばいほどのピュアファイターになるからなく。これは一海さんが当てはまる。

「まあ、なんとかなるんじゃない？お前には政府が専用機を出すらしいし」

俺のこの一言に周りで聞き耳立てていた女子たちが一斉にガタッと席から立ち上がった。

「ええ！織斑君こんな時期に専用機もらえるの！？」

「いいなあ！」

「ウホ！いい男！」

食堂はちょっとした騒ぎになったが俺は気にせず箸を進める。周りは羨ましがっているがようは男性操縦者のデータを得るためのモルモットだからね。さらに言うならもしもの時はこちらに従えという首輪だからね。ま、束さんが何かしら細工するらしいが。

「……………なあ」

「なんだよ？」

「せんようきってなんだ？」

一夏のこの発言により周りは打ち合わせていたかのようにズコー！とズっこけていた。いや、一夏お前。

「……………整いました。一夏の頭脳と掛けましてツンツン頭と掛けます」

「……………その心は？」

「どっちも鳥頭でしょう」

「?どういうことだよ？」

「……………」(、口、)「ハア。お前がバカっていうことだよ」

「ばかじゃねえーよ！」

「じゃあなんでさっき授業でやったことを忘れてんだよ！」  
「ていうか字面でわかるだろ！」

「……………」一夏。流石に今のは擁護できんぞ」

「箒まで!？」

「じゃあ、箒ちゃん。説明よろしく」

「ちゃんをつけるな。コホン、でh」

説明しよう！専用機とは、その名の通りパーソナライズされた機体のことをさす。ISコアは現在467個しかない。それを全世界で分配しているわけだが実戦配備されているものが大半であり企業の開発用は基本的に少ない。更にそれを世界で分配しているんだから国でも使えるコアなんか十数個あれば多い部類で数個の国が大半だ。そこから貸しているような形だが個人用にパーソナライズされた機体を与えるというのだ。

「というわけだ。ところで今私の説明が誰かに丸々カットされたように感じたんだが気のせいかな？」

「気のせいでしょ。まあ、あのブリティッシュガールはともかく、問題はレミアアだろうな」

「そんなに強いのか？」

「ぶっちゃけ比べ物になんないだろう。なんたってレミアアは国家代表だ。候補生でしかないオルコットと比べるのも烏澁がましいだろう」

レミリアにだけは俺も負けるわけには行けない。ていうか、他の二人にも負けるわけには行けないんだけど。

「ごちそうさまでした、と手を合わせて席を立つ。」

「もう戻るのか？」

「ああ。少し山田先生に用もあるしな。それに、お隣さんは二人つきりをご所望みたいだし」

「なっ！／＼／＼」

「じゃあ、あとは若い二人でってことで、C h a o！」

「そう言って食堂を飛び出し俺は職員室へと向かった。」

時間は飛び放課後。俺は教室で一夏と駄弁っていた。

「あゝ。まだ頭がヒリヒリする」

「あの人すごいな寸分たがわず同じ場所に出席簿を落としてたぞ」  
「やっぱリプロは違うな。いや、何のプロかは知らないけど。」

「でも、今日やったところ基礎中の基礎だぞ」

「むしろなんでお前は着いていけてるんだよ」

「まあ自分、天っ才ってやつですから」

「そういうと一夏はそうかそうかお前もそういうやつなのかみたいな視線を送る。おい、姉弟そろって同じような視線を送るな。二人とも同じ反応を示したということはなるほど東さんのせいかな。今度お菓子抜きに処してやろう。」

「なんで!？」

「ん?今兎の悲鳴が聞こえなかったか？」

「あ?何言ってるんだお前?頭打ったか？」

「馬鹿に頭おかしいなんて言われたくないっての」

「馬鹿じゃねーよ。せめて剣つけるよ」

いや、筋肉じゃないんかーい。

「良かった。まだいたんですね」

そう言って入ってきたのは山田先生だった。どうしたんだらうか。  
それよりも

「どうしたんですか?そんなに慌てて」

「実はお二人には本日から寮に入ってもらおう運びになりました」

「え?一週間は家から通学するって聞いてたんですけど」

今更かもしれないがこの学園は全寮制だ。まあ、全世界から集まっているんだし機密も多いだろうし当たり前前の処置だろうけど。まあ、安全性を考慮すれば正解なんだろうけど、これってあれでしょ？監視下に置きたいだけでしょ？

「織斑、お前の荷物は私が持ってきておいた」

「俺のは「貴様の妹が用意していたはずだ」…了解です。ああ、それと山田先生、例のものは」

「はい、用意できてますよ」

そう言って渡してきたものは二枚のディスク。それと一緒に寮の鍵ももらった。

「なんだよそれ？」

「んーちょっとな。んじゃ、俺はこれで、Chao♪」

俺はまっすぐ寮へと向かっていた。えっと、1053室、1053室、とここか。

俺はノックし、先に中にいるであろう人に入室の許可をもらう。

「ちわー三河屋です」

「ふざけないでちゃんと入ってきてください」

「じゃあ、入るよ。やっぱりさとりだったか」

まあ、織斑先生が妹が荷物持ってくるって言ってたしね。これぐらの推理はお手の物よ。

「まあ、そういうことです。またよろしくお願いしますね」

「よろしく。お兄ちゃん♪」

そう言って二人の妹に改めて歓迎される。やばい目から汗が。お義兄ちゃんウルトラ感激。

「まあ、まずやるべきことは」

そう言ってポケットからスイッチを取り出す。

「タリタラッタラ♪盗聴器破壊装置♪（ダミ声）ポチっとな」  
ボタンを押すと、部屋のコンセントから煙が立ち上る。ふっ機密  
情報が流出しなかったただけかもしれませんがと思うんだな。

「さとり、冷蔵庫。持ってきてくれた？」

「……………ありますよ。全く、学園の整備室でやればいいものを」  
一応ライダーステムも絡むからな。そんな誰が見ているかが分  
からないところでおいそれと開発は行えない。

「じゃあ、俺は新装備の製作を進めているけど、遅い時は先に寝た  
りしてて構わないからな」

「ほんとに大丈夫ですよ？集中しすぎて気づいたら一週間過ぎて  
いたなんてことにはならないですよ」

「H A H A H A、さすがにそんな間抜けじゃないよ」  
「ならいいんですけど」

俺は大丈夫だから、と言って冷蔵庫の扉を開きそれをくぐった。  
くぐったその先はいつもの俺の部屋だった。

「……………いるか？」

俺がそう呼びかけるとそいつはどこからもなく現れた。

『よお、ちゃんというぜ。お前さんにくっついてんだからな』  
そりゃそうだ。

『でも、こういうのには役に立たねーぞ？』

いいんだよ。いざという時に頼るから。

「さて、始めますか」

そして俺は椅子に腰かけた。机には新武器とファング、そして恐竜がかたどられたボトルが置かれていた。

そして長い時間が過ぎた。

「完成だ。……………完成だああああ！」

よっしゃー！！やっと完成した！やっと完成した俺の俺による俺のための俺プロデュースの武器！っふうー！ー！こんやは焼肉っしよー！！

「…………っハ！今何時だ？そろそろ朝になっていてもおかしくはない  
「ええ、もう朝ですよ」

声の主の方を向くとそこには額に青筋を浮かべにこやかな笑顔を向けているさとの姿だった。

「ええ。もちろん朝ですよ。ただし、あれから一週間たった朝ですよ」  
「が」

「……………え？」

うっそだー。そう思いながら俺はスマホの電源を入れる。あれ？

付かない。あ、充電切れてる。今度はPCのデジタル時計で確認すると確かにあれから一週間たっていた。うっそーん。

『ほんとに大丈夫ですよ？集中すぎて気づいたら一週間過ぎていたなんてことにはならないですよ』

『H A H A H A、さすがにそんな間抜けじゃないよ』

はい。そんな間抜けでした。だからどうかそのISの主砲を向けるのをやめてくれませんか。てか、一週間たったってことは。

「そうですよ。今日がクラス対抗戦の日ですよ」

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
[http://www.akatsuki-novels.com/stories/index/novel\\_id~23698](http://www.akatsuki-novels.com/stories/index/novel_id~23698)

---

Re.IS～For the love & peace～

2020年12月28日 03時51分発行